



Title	ボランティアは躓きながら現地をめざす : 利他の精神のN字型進展
Author(s)	弓山, 達也; 青木, 繁; 市村, 知輝 他
Citation	宗教と社会貢献. 2020, 10(2), p. 27-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77219
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ボランティアは躓きながら現地をめざす

—利他の精神のN字型進展—

弓山達也・青木繁・市村知輝・太田龍之介*

The “N-shaped Model” of Altruism:
Volunteers Stumbling through Activities

YUMIYAMA Tatsuya, AOKI Shigeru,
ICHIMURA Tomoki, ŌTA Ryūnosuke

論文要旨

本稿の目的は、ボランティア従事者における利他の精神が他者とのどのような関係や省察から進展するのかを明らかにすることにある。そのため関与型調査に基づき、オートエスノグラフィの手法を用いて、調査者自身の体験や内省を分析した。また具体的な記述法としてTLED法を採用した。その結果、ボランティア従事者が関係準拠的な関わりから、実践の場で躓き、逡巡・迂回するかたちで、そこから気づきを得て進展する、利他の精神の「関係準拠的N字型モデル」を示すことができた。

キーワード ボランティア、利他、TLED法、N字型モデル、オートエスノグラフィ

In this paper, our purpose is to show how the motives of altruism among university student volunteers change through self-reflection and their relationships with others. Therefore, using autoethnography based on an intensive “researcher in the loop approach,” we analyzed our own experiences and internal reflections as university student volunteers, employing the TLED method. In this study, we explored the “N-shaped model” of altruism, which entailed being dependent on others as volunteers. There were highs and lows during the activities and different levels of awareness were achieved.

Keywords: volunteer, altruism, TLED method, N-shaped model, autoethnography

* 弓山達也（東京工業大学教授 bxm03363@nifty.com）、青木繁（同大学院博士課程）、市村知輝（同大学院修士課程）、太田龍之介（同大学院学士課程）

1. 問題の所在

本稿の目的は、ボランティア従事者における利他の精神が他者とのどのような関係や省察から進展するのかを、調査者である私たちと被災地の当事者との対話、そしてそれに対する私たちの省察の記録から明らかにすることにある。そのため私たちは市民団体の主催する東京電力（以下、東電）福島第一原子力発電所（以下、第一原発）構内視察とその後のワークショップに参加し、その際の体験を記録し、吟味し、推敲を重ねた。具体的には私たちは関与型調査に基づき、オートエスノグラフィの手法を用いて、私たち自身の体験や内省を分析し、その記述法として TLED 法を採用した。

なおここでいう「利他」とは「自分の利益だけでなく他者の利益を考えて判断し行動すること」[岩瀬 2006: 19] とする。この定義の優れた点は、一般に利他が利己を対義語とするあまり、自己を利することを含まない「利他」概念が流通する中で、『瑜伽師地論』における「自利・利他」（自己の利益と他者の利益とを融合して考える）に基づき、利他に自利を含めている点にある。ボランティア従事者の記録を読むとき「自己実現」「自分のために」は重要な契機となり、むしろこうした「自利」を含む「利他」こそ、ボランティアの利他の精神を語るうえで現実的であると考えられるからである。

ところで本稿には、これを執筆するにあたって 2 つの実践的、研究的背景がある。第一の背景は、東日本大震災後にボランティア報告書が多数編まれ、中には優れたアクションリサーチ [似田貝・吉原編 2015、佐々木・稲場 2017、朴ほか 2018] や宗教社会学からの理論構築 [稲場 2017] があるものの、多くは「自分の体験を人に伝えたい」「ボランティアに行ったが逆に勇気を貰った」「継続的な活動が必要」など、紋切り型の模範解答が目立つことである。それはボランティア従事者が議論をしていく中で、最大公約数・最小公倍数的な「誰にも当てはまること」に収斂していくために生じられると思われる。

これと関連して第二の背景として、私たちはボランティア研究におけるボランティア従事者像もまた模範的な人間像を描いていることに気づいた。ボランティア従事者の定量的研究は、利他の精神が諸条件（動機や従事者

の属性・家庭環境・資質等)によって [三谷 2016]、また「交流」「自己実現」[杉本 2019]、「リーダーへの憧れ」「継続的活動への希求」「自己成長」[楠本・三井 2020、杉本 2019]、「役に立ちたい」「自己成長」[國木 2020]を求めて、「内発的・自発的」に「無償で」「公益性」のある活動に向かうこと [千葉 2009、高田 2012] を解明してきた。つまりボランティア非従事者からボランティア従事者へ、諸条件が整い、内発的に、他者との交流と自己実現を求めて、無償で善き行いに向かう利他の精神の「自律的直線モデル」といえる。しかしボランティア従事者は動機が外発的だったり曖昧だったり、また活動に疑問を持っていたりすることが少なくない。そのため自律的直線モデルとは異なる利他の精神の進展モデルを描くことが要請されよう。

本稿ではこうした 2 つの実践的・研究的背景を伴い、模範的な解答や人間像の鋳型に流し込まれる前の、多様で起伏に富んだボランティア体験とそれを支える個々の利他の精神の進展を描くことができないかという問題意識に貫かれている。

2. 調査の概要—その対象と方法—

2.1 調査団体の概要

2.1.1 東京工業大学ボランティアグループ

後述するように、本稿の主要部分はボランティアに心寄せる私たちが、被災地の市民企画に参加した際の記録と省察となっている。私たちは東京工業大学ボランティアグループ (以下、通称の「VG」と略記) のメンバー、その担当教員、そして VG の過去のスタディツアーにも関わったことのある今回の企画参加者である。この VG は 2011 年、東日本大震災後に「大学内で何か復興のお手伝いをしたい」という想いにより設立され、震災直後は写真洗浄、PC のセットアップなどを行ってきた。

それに先立つ 2007 年に東工大が文科省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」に採択され、学生支援 GP (Good Practice) を開設し、2013 年に改組が行われ、学生支援センター自律支援部門となり、VG はこの部門下で、学生世論調査や新入生サポートなどの学生団体とともに認

可された学内唯一のボランティア団体である。

VG の活動には復興支援活動、防災活動、地域連携活動の 3 つがあり、具体的には東北や熊本などの被災地の物産展の主催（年数回）、被災地スタディツアーの実施（不定期）、学内・外の防災活動の実施（年各 1 回）、子ども食堂の開催（月 1 回）などを行っている（2020 年度はコロナ感染拡大防止のため、上記活動を休止し、オンラインにての学内ハザードマップ作成に移行中）。

2.1.2 未来会議 [霜村ほか編 2020]

私たちが参加した第一原発視察とその後のワークショップは未来会議が主催したものだった。同会は 2013 年 1 月に東日本大震災と第一原発事故が引き起こした諸問題を「対話」を通じて考える場（を提供する市民団体）である。年数回のワークショップ型の対話を主催し、特に 2017 年 2 月から 2019 年 11 月までの 9 回は「浜通り合衆国」をテーマにした。私たちが参加した企画はその最終回にあたり、11 月 30 日終日を使って開催され、視察後に富岡町の東電廃炉資料館で地域住民、東電社員、避難者、移住者、行政関係者など 40 名で対話を実施され、さらに私たちのうち 2 名を含む有志はいわき市内で「夜の未来会議」という懇親会にも出席した。

浜通り合衆国は、いわき市を中心としつつ、南相馬市、富岡町、檜葉町といった浜通り地域の各地でも開催され、また街歩き、バスツアー、よさこいの演舞も実施され、最終回は「(其の九) はまあるき in 原発」と題された。私たちのうち弓山は 9 回のワークショップのうち 5 回の企画に参加しているが、それ以外のメンバーは未来会議自体がはじめてであった。

2.2 関与型調査・オートエスノグラフィ・TLED 法

私たちは本稿を執筆するにあたり、参加する企画や対話相手を調査対象と見なさず、むしろ調査者一被調査者という距離を縮め、私たち自身をも調査対象としつつ、検討を重ねた。こうした手法は参与観察から一歩進めた、関与型調査ともいべきものを目指した⁽¹⁾。同時に私たちは自ら自身を調査対象とすることに関してオートエスノグラフィを意識した。オートエスノグラフィとは自己を社会的文脈の中に位置づける自己物語の形式であり [Reed-Danahay 1997: 9]、アダムスら [Adams et al. 2014: 1-2] によれば文化的信念・実践・経験を記述するため、研究者自身の体験を用い、他者と

の関係を重んじ、再帰的な自己のあり方に深く思いを凝らすという。日本でも 2000 年代に入って教育学、社会学、心理学の質的アプローチとして、この手法を用いる研究が登場してきた。

私たちはこうした関与型調査に基づき、オートエスノグラフィを具体的にどう記述するかにも腐心した。冒頭にも述べたように、私たちの「多様で起伏に富んだ」関わりを描くにあたり、TLED 法を用いた。これは「タイムラインの流れ (Timeline) と、調査者がとらえたエピソード (Episode) と、そこで調査者の発話やアクションによって起きる場の変化、あるいは調査者の自分自身との内的対話 (自己省察) による自らの変化というダイアログ (Dialogue) の 3 つの位相を同時に記述する」[河田ほか 2018: 7] 試みである。そこでは執筆者間の議論の結果よりも、初稿から改稿を繰り返す過程を原稿に留めることに重きが置かれた。これにより私たちは、自分の体験を持ち寄り、検討・吟味することで陥りがちな模範解答への帰着を避けることができ、全体像を描きつつも、個々の「多様で起伏に富んだ」体験の記述が可能になるものと考えた。

私たちが参加した企画の記述に移る前に、私たち自身の紹介をしておこう (表 1 参照)。市村知輝は大学 1 年生の初年次教育で開沼博のいわき海洋調べ隊「うみラボ」に関する講演を聴いたことをきっかけに被災地応援プロジェクトを結成。福島大学との共同ボランティアで田村市の援農に関わり、また 2018 年 3 月 13 日には福島県富岡町の除染作業現場のスタディツアーを 19 名の参加者を得て実施してきた。同プロジェクトは VG に合流する形で発展的解消となった。VG では 2019 年 1 月 19 日にいわき市久之浜、檜葉町、富岡町を回るスタディツアーを企画し、26 名の参加者があった。中野みどり (仮名) はキムワイブ卓球会という学内サークルで大学院の先輩に誘われて VG に参画。太田龍之介はその中野に誘われる形で参加。青木繁は VG メンバーではないが、大学院で利他について研究し、そのきっかけが海外の日系宗教のボランティアに触れたことだったこともあり、VG に関心を持ち、上記の VG のスタディツアーに参加し、今回の参加となった。弓山は 2016 年度より被災地応援プロジェクトをサポートし、2018 年度より上記自律支援副部門長として VG を担当し、定期的なミーティング出席、活動参加、相談業務を行っている。

本稿では以下の 3.1 から 3.8 で、この 5 名による「はまあるき in 原発」の

記録を集合・視察・対話といった企画の流れ（タイムライン）で説明し、適宜、エピソードとダイアログを配置した。タイムラインは共同執筆で「私たち」と個人名で記述しているが、個々の文責となるエピソードとダイアログは主観を重んじるため一人称とし末尾に執筆者名を記した。なお私たちは掲載された記録とともに、市村とこの企画には関わっていないVGメンバーの川島由美（仮名）のボランティア記録²⁾も参照している。川島はVGの創始者が起業したカフェでアルバイトをしていて、そこで子ども食堂が開催されることとなり、VGに接近することとなった。

表1 VGメンバー等の参加のきっかけ

氏名	所属など（当時）	ボランティアや企画参加のきっかけ
市村	4年生・VGメンバー	初年次教育で開沼博の講演を聴いて
中野	3年生・VGメンバー	サークルで先輩に誘われて
太田	3年生・VGメンバー	サークルで中野に誘われて
青木	大学院生・VG企画参加者（2回目）	海外勤務中で新宗教のボランティアに触れて
川島	3年生・VGメンバー（企画不参加）	バイト先で子ども食堂が開催されて
弓山	VG担当教員	前任校で被災地支援・学生引率を業務として

3. 歩き、対話し、躓き、逡巡・迂回しつつ前進する

3.1 東電社員の出迎え

今回の視察の集合場所とワークショップ会場は東電廃炉資料館である。弓山は2019年1月、3月に続いて、3回目の訪問となる。市村と青木は2回目だ。富岡駅から歩いて赴くと、駐車場に出迎えらしき社員がいて、「お待ちしていました」との挨拶。明らかにこれまでの対応と違う。会場に入る前に350円の昼食チケットを購入するように言われるが、チケットは社員にあずけるように指示される。

待機会場は全席指定だ。時間になって担当社員が私たちの前に立つ。数名、参加者がまだ到着していないこと、昼食チケットの枚数が合わないことなどで、なかなか開始されない。やや時間が経って全てが整って、担当

が深々と頭を下げ、「この度は大変なご迷惑を」とお詫びの言葉が始まる。少し説明があり、2階のシアタールームで原発事故に関する東電側の謝罪と廃炉作業の現状を知らせるVTRを視聴する。ここでも再度、お詫びの言葉。これまでも資料館を訪れた際、最初に見るフィルム上映のアナウンスに合わせて、やはり社員は暗い会場の前方で深々と頭を下げている。そしていづれも「別に謝られても」という声が漏れていたのが印象的である。

上映が終わると元の会議室に戻り、第一原発に入構するにあたっての注意事項が指示される。カメラや携帯電話が持ち込めないのは予想できたが、筆記用具と配布された資料のみの持参で、カバン類、ペットボトルなどの携行は遠慮してほしい、トイレも制限されるので資料館で済ませておいてほしいとのこと。あまりにも細かい、そして煩雑とも思える指示に、中には「入試みたい」「テストされるんじゃないかねえ？」などと軽口を言い合う者もいる。資料館を出て第一原発構内行きバスに乗り込む際、「テロ防止なんだから、しょうがない」と数回こうした視察に参加している者が言ったが、「しょうがない」という声が出るくらい、やや抵抗感ある対応で、しかもそれが深々と頭をさげる陳謝とそぐわず、参加者は戸惑い気味である。

【エピソード】東電社員の苦悩

今回の見学会で、東電からの説明が何度かあったが、一貫し東電社員は「事故を起こし申し訳なかった」という姿勢である。説明は現状を包み隠さず伝えようと、謙虚である。説明資料も判りやすく適切で詳細なものである。バスの中で行われた質疑応答では、今月起きた作業事故数などネガティブと受け取られかねない出来事の件数なども交え、率直なやりとりが行われていた。(青木)

構内視察後の対話では、最初に登壇した東電社員、いわき市内と富岡町の住人と愛知県から来た人と同じグループとなった。やはり東電社員に質問が集まり、東電社員は年に1回は福島でボランティアをし、時には子どもが、親が東電社員であることからのいじめにあうこともあるという。私は初めて聞く話だった。そこで挨拶の冒頭での陳謝に触れ、「でも東電の元会長は、津波は予見できなかったって言って責任回避ですよ。なのに社員は謝っている。だからあなたに謝ってもらおうと心苦しい」と率直に告げた。しかし社員は「この制服を着て、東電のバッジをつけている限り、私は東電の人間ですから」と答えるばかりであった。(弓山)

【ダイアローグ】責任の所在は

話を聞きながら「しかし」という感じが私の心の中に聞こえる。それは、うまく説明するのが難しい。原発や廃炉プロセスを声高に批判するようなこととは全く違う種類の疑問符である。では、私の「しかし」という感覚は一体何なのだろうか？ 多分、いま国の政策が進めている方向や裁判で争っている論理と、この資料館や説明してくださる社員の姿勢との間にある、ある種の不整合かもしれない。心の中で「うー」と言いながら、目の前の東電社員にはとても言えない「何か」が心の中に残った。(青木)

その後の東電社員を交えての対話でも釈然としないやりとりが続いた。企業の責任の話になった時、「水俣」の例が出された。その時にサーッと霧が晴れたような気がした。それは東電社員の謝罪の腑に落ちなさ、実は私たちにこそ責任があることを覆い隠しているということに気づいたからだ。視察の際にいわき市の人が出た。「東電の電力は全く福島に来ていない。全て東京に行っている」と。つまり原発は東京の人々の快適な生活のために福島で作られ、送電されている。原発事故の元を辿れば、私たちの生活の快適にその原因があるのだ。チッソ水俣も現代生活に欠かせない塩化ビニールやその成形に必要な可塑剤生成のために水銀触媒を用い、その結果、メチル水銀を垂れ流したのだ。かつては原発 PR 施設(旧エネルギー館)だった廃炉資料館での末端社員の謝罪は、東電首脳陣の責任を隠蔽しているのではなく、私たち自身がその責任から目を背ける構造の一角をなしているということに気づいた瞬間だった。(弓山)

3.2 廃炉資料館見学から第一原発へ

映像の視聴の後、廃炉資料館の案内で東電社員から、震災当時の事故の状況や、どうして被害が起こってしまったかといった説明がなされる。展示映像はとても丁寧で、事態の重大さを十分認識し、抑制的なものである。説明する東電社員は、現在の廃炉への課題をできるだけ包み隠さず伝えようとする姿勢だ。具体的には、実際に水素爆発した 1~4 号機の状況、港湾内外の放射性物質濃度の変化、汚染水と原子炉循環冷却の関係、汚染水対策の 7 つの基本方針、重層的な汚染水対策に伴う汚染水発生量の低減、作業員の労働環境の改善、中長期ロードマップと燃料デブリ取り出しに向け

た取り組みの7つの話がある。

東電社員は1~4号機の爆発と3つの汚染水対策については、特に詳しく説明をする。それによると、地震発生当時は非常用電源が作動していたため、何も問題はなかった。しかし、その後に押し寄せた津波の影響で非常用電源は使えなくなり、建屋内の燃料棒を冷却する水の循環が止まった。そのために水が急速に蒸発し溶けた核燃料と反応して水素が発生し、水素爆発してしまったのである。そしてこのようなことを引き起こしてしまったのは、彼らの原発に対する驕りがあったからだとの謝罪がある。

汚染水対策については汚染源を取り除く、汚染源に水を近づけない、汚染水を漏らさないとの説明。特に2つ目、3つ目に力を入れているらしい。具体的には、地下水バイパスや建屋近傍の井戸による地下水の汲み上げ、雨水の土壌浸透を抑える敷地舗装、凍土方式の陸側遮水壁の設置、水ガラスによる地盤改良、タンクの増設を行っている。汚染水の処理ルートも詳しく解説がある。そしてこの後、バスで第一原発構内へ移動となる。

【エピソード】車中のおしゃべり

廃炉資料館から第一原発まではバスで20分程度だった。バスに乗る前に、のど飴や時計や携帯や財布も含め持ち物は全て置いていかなければならず、私は、トイレを済ませ、1本のペンと1枚の紙だけを持ってバスの後ろの方に乗った。バスは10分程走ると帰還困難区域となった。この区域は四輪の自動車以外は通行できない区間であり、窓を開けたり、外気を取り入れたりすることは基本的に禁じられている。第一原発構内に入ると、バスを乗り換えた。東電社員がバス内最前列に立ち、バスはゆっくりと構内を巡った。重要施設の前ではバスが止まり、彼らによる説明がされた。そんな中、私の後ろに座っていた人達、4~5人が別の話で盛り上がっていた。東電社員が話をしている時も、彼女らはYouTubeの話で会話が膨らんでいた。真面目に話を聞いている人とのギャップが大きかった。(太田)

【ダイアログ】おしゃべりの背景

私は後ろでうるさく喋っている人たちに対して苛立ちを覚えた。東電社員が前で一生懸命説明しているのにそれを聞かないというのは、どうなのかと思った。私自身が東日本大震災で大きな被害を受けたわけではないの

で、彼らの態度に物申すのはヘンなことかもしれない。ただ、人の話を聞かずに身内で大笑いするというのはマナー違反だと思う。他の参加者、特に大きな被害を受けた方はこのことに気付いているのか、気付いているとしても気付かないふりをしているだけなのだろうか気がなった。

その後、このグループの一人は大熊町出身で、家には震災以来帰れずにいることを知った。その上で私は、なぜこの人はバスの中であるような行動を取ったのかを考えた。私の推測だがこの行動は、もうそんな暗い話は聞きたくない、楽しく生きたい、と彼女なりに考えた抜いた結果であり、周りの人もそれに賛同しているということなのかなと思った。おそらくこの8年間の間に数え切れないほどネガティブな話を聞き、数え切れないほどネガティブな感情になっただろう。そこから、少しでも前に進みたいという意思の表れなのではないだろうか？ 今思えば、彼女は会議中、笑顔を浮かべながらも真剣な表情をしていた気がする。主催者の心がそこにはあった。この会議を記録しなくてはならない、未来に繋げるんだという思いが。このことから私は、他人をその時の出来事からのみ判断するのではなく、なぜこの人はあのような行動を取ったのだろう、とその人の背景を捉えることが重要だと感じた。(太田)

3.3 第一原発の視察

第一原発の構内入口ゲートでは、名前が一人ひとり呼ばれて本人確認が行われる。その後、放射能を検知する線量計と黄色のベストが渡され胸元につけるように指示される。線量計は被曝量がある一定値を超えると音が鳴るしくみである。その周りで行き来する作業員は白い防護服を着ている。東電社員から、私たちは「バスからは降りないので防護服は不要」と言われるが、この時、青木は「いよいよ現場」と緊張したという。

作業構内に入る。構内の検問所でバスはまた一旦停止、チェックを受ける。週末は要員が少ないそうで確認に時間がかかる。確認作業が終わると鉄板で覆われた仮設道路をゆっくりと進む。周りにはパイプラインが縦横に走る。1号機が前方に見えてくる。バスは廃炉作業中の1号機原子炉のすぐそば、およそ数百メートル位まで近づく。テレビで見た光景にさまざまな思いが去来する。青木は「ここがああの映像の場所だったのだ」と、事故当日、陽炎のように揺れる遠景から撮影した原子炉の建屋の爆発の瞬間の

映像を思い出したという。

廃炉作業中の施設群と渡された資料を見比べ、私たちが今どこにいるかを確認する。作業員の人影はまばらである。随時、東電社員から説明がなされる。さらに隣接する双葉町に入りバスは進む。途中、構内には汚染水タンクが至る所に置かれている。驚く量の汚染水である。その処理の困難さを納得する。およそ一時間少し、構内を周り終え、再び入構した場所に戻る。線量計の検査が一人ひとり行われる。青木の線量計の数字はゼロで、係員に「問題なし」と言われる。しかし、バスの中だとはいえ、私たちは「数百メートルまで廃炉作業現場に近づいたのにゼロ？」と思ったものの、青木は、正直、ほっとした気持ちにもなったという。

社員食堂で昼食をとり、記念写真撮影を行い、朝集合した廃炉資料館までバスで戻る。帰路の車中では車内放送を通じて、東電社員との質疑応答になるが、皆、考え込んでいるのか質問は少ない。いつもは冗談ばかりを言う未来会議の常連から「途中に見えた東電の標語「原子力明るい未来のエネルギー」について、今もそう思って、例えば自分の子どもに言えるか」という質問や、いわき市在住の僧侶から「原発内で亡くなった方の慰霊碑があるはずだが、今回のルートにはなかった」という質問などが、車中の雰囲気をもより厳粛なものにする。そして午後の対話が始まる。

3.4 対話の開始

対話の会場は集合場所と同じ会議室である。会場には紙をクロスのように敷いた机2つが並び、そこに4、5人が座れるように椅子が配置されている。席に着き、司会の進行に従い話をしていく。まず簡単に自己紹介を行い、見学をして何を感じたかを話し合う。

その後司会から対話とは何か、今回の対話の形式およびルールについての説明を受ける。今回の対話はワールドカフェという形式である。対話とは自分と相手の考えの違いに着目することであるという。また、一つのテーブルを「国」として私たちの考えとして意見を共有する。対話では2回グループ替えが行われる。1回目は、しばらく話し合った後、一人代表者を残して別の「国」へと「旅」に出るかたちで行われ、代表者が自分たちの「国」で話したことを新たに訪れた人に話し、そこから対話を広げていく。1回目で話し合われた話題を2回目のグループで共有するのだ。そして2回

目のグループ替えて、もとのグループに戻って対話の内容を各自共有する。その過程を通して自分の中で心境の変化をとらえ、次の活動に活かすことを目的としており、何か特定の課題解決のためのプログラムではない。

対話のルールとして、ファシリテーターより①耳をすませて聴く、②断定・否定をしない、③答えを出そうとしない、④沈黙を歓迎する、⑤気づきを大切にするなどがあげられる。同じ事実を見ていても、見る人の過去の経験によって見え方は真逆にもなりうる。意見が違うことは当たり前だが、その時に相手を否定して言い合いをするのは対話ではない。過去の経験に遡って話すなどして、なぜそのような考えとなるのかを話し、「そういう考えもあるんだ」と思うことが対話であるようだ。

約 20 分近くの説明の後、5 名のゲストによる話題提供がある。5 名は地元の漁師、富岡町出身の大学生、震災当時第一原発、今は高浜原発の勤務者、中間貯蔵施設地権者、富岡町のよさこいチームのリーダーだ。

以上を受けて、「8 年間暮らしてきて、震災や原発に関連して今何を感じていますか？」という問いに対して対話が始まる。

【エピソード】風評被害についての対話

1 回目のグループでは、地元で被害に遭われた人、福島市在住の人、首都圏在住だがこれまで未来会議に何度も参加してきた人と一緒になった。震災当時を振り返りつつ、対話のテーマ（今何を感じているか）について話した。その中で、風評被害の話になった。「当時は結構、魚とか農作物とかで風評被害がありましたよね」という声があがった。それに対し地元の人、「風評被害は今もある」と話していた。

2 回目のグループでは、地元の人 2 人とかつて原発で働いていた人と一緒になった。そこで私は、最初のグループで風評被害が話題となったことを話した。加えて自分の感想として、「事故当時ほど風評被害があるように感じていなかったのが意外だった」と話した。すると、地元の人のうち一人は驚いた表情をしていた。

1 回目のグループに戻ったところで、再度風評被害の話となった。福島市在住の人から「自分はそのままでひどい被害を受けていないのに、避難先の人に「大変だったね」と言われたことになんともいえない気分になった」という話を聞いた。このように、ひとくくりに「被災者」として扱われることも風評被害の一種であることを知った。（中野）

【ダイアログ】風評被害とは何か

私の「今も風評被害があることが意外だった」という発言は、農産物の放射能汚染に対する過剰な反応などを想定しての発言であった。また、自分の周りであまり聞かないからというだけで、現状がどうなのかは知らずにしてしまった発言でもあった。しかしその後の対話で、風評被害にはひとくくりに「被災者」として扱われることなども含まれることを知った。

これらから、自分の知識・想像力のなさを実感するとともに、そもそも風評被害とは何なのかということに疑問をもった。辞書では根拠のない噂や憶測による経済上の損害と定義されている。しかし今回聞いた話の中には、被災者の精神的、心理的な損害の話もあった。このことから、風評被害とは経済上の損害に限らず、さらに広い範囲での損害を指すのではないかと気づいた。今回の未来会議に参加し、実際の声を聴かなければこのことには気づかず、経済上の損害だけを風評被害ととらえ続けていただろう。

(中野)

3.5 対話—語れないもどかしさ—

市村が配属された 1 回目のグループでは、ファシリテーターが提示した「震災や原発に関連して今何を感じていますか」ということについて話し合ったので、各参加者の立場や震災に対する考え方があらかじめ判り、発言しやすかったという。

しかし 2 回目のグループとなると、前のグループで別々の話題が展開されているばあい、4 人の話の共通点が見出しにくいこともある。市村の 2 回目のグループでは、各参加者の震災に関する考え方も不明瞭であった。そこで話題提供の漁師が語った風評被害の実態に話移っていったという。メンバーは東電社員、福島市のサラリーマン、週 1 回ほどのペースで福島に仕事やボランティアで来ている東京在住者で、市村は風評被害についてあまり知識がなく、参加者の話を聞いている時間の方が長かったとふりかえる。市村以外の参加者は 40～50 代の勤め人であることもあり、仕事の話や福島に関するニュースと絡めて話題が展開される。東電では、東日本大震災の記憶の薄い世代がこれからどんどん社員として入ってくる中で、教訓をどのように伝えていくかが今の課題であること、日本航空が日航機墜

落事故を社内で後世に伝えることに悪戦苦闘しており、企業間での協力なども協議されていることなどが話される。しかし学生の市村にとって「私の経験では」となかなか話を切り出すことができず、歯がゆい時間が続いたという。彼は目の前で展開される話題は知識の共有のように思え、相槌をうつばかりである。

話し合いが終わり、市村が元のグループに戻ると、各自が参加したグループでの話題の共有とともに、各々の活動に関する悩みが話題に上る。ここではうまく参加者と対話ができたと実感した市村は、先ほどのグループとの違いは何なのだろうと考え始めた。

【エピソード】語れないこと

2回目のグループで、その中でどうして私はうまく入っていけないのだろうと悩み焦った。確かに福島のニュースに関する知識や仕事上の経験に乏しく、共通の話題が見つげにくかったものの、自分の経験はいくらでも語るができるはずである。だとすると自分が発言できなかったのは自分の日頃の経験と震災やボランティア活動とをうまく結びつけることができているからなのだろうか。

考えを巡らせた結果、私は震災について、一緒にボランティア活動をするメンバーとしか話していないのではないかと、被災者の方からは当時のお話を事実として受け止めるだけで対話を行っていなかったのではないかと実感した。それは、私にとって福島のことや福島に行き活動することは、いまだ非日常的なものであるからだと思う。年に2、3回の現地での活動は一年のうちに占める時間としてはやはり非日常的なものになってしまうが、震災や被災者の日々の生活は自分の日常とつながっているものだという認識がとても薄かったと実感した。こうした意識の隔たりが、福島に住む人との対話を阻害しており、震災について自分の意見しか語れないことの原因となっているのではないかと考える。被災者の個別の話を聞くことを重視していただけないに、自分の被災地に対する認識の浅さを省みる経験となった。(市村)

【ダイアログ】知識としての被災者の声

震災を直接経験していない者として、福島に実際に赴き、震災について

の生の話を集める活動は大きな学びとなったが、それはいまだ自分の中で事実や知識としてしかとらえられていないのではないかと実感した。年に数回の現地のボランティア活動ではあるが、被災地の人に自分なりに寄り添いたいと思っていたのに対し、「現地で受けた学び」だと思っていたものが自分の中では「知識」でしかなかったと感じた時、とてもショックであった。これはおそらく、現地で経験したことを自分の実生活に当てはめて考えてみる、自分の意見も含め外に発信するという時間や経験が少ないからであると考え。また被災者の声を絶対的なものだと、それを疑ってみる余地を与えなかったからだと思った。

自分が経験していない震災に対し、当事者性を感じにくいことを改めて理解した。この当事者性を持つためには大きな意識変化が必要であろうが、どうすればそれが得られるのか、それとも当事者性は得られないことを受け止めたうえで活動していくことが自分にできることなのかはまだ定かではない。(市村)

3.6 対話—想像力の欠如—

弓山のグループは、第一原発構内が整然と片付いていること、そのため近隣地域より放射線量が低いことなどが、意外性として語られた。弓山は帰還困難区域の立ち入り禁止のバリケードに触れて「そこに自分の家があるのに帰れないということが信じられない」というような発言をする。これに対して富岡町に2017年に移住してきた未来会議メンバーからは「自分の家がいつ奪われるか判らないということに思いが至らないとは想像力が欠如している」との反論が出される。彼は生まれたばかりの子どもをあやしつつ、「結局はここに住んで子どもを持たないと判らない」と続け、それには別のメンバーから「そんなこと言ったら」と違和感が表明もなされ、その場はやや緊張感を帯びる。やがて話は企業の責任から「水俣」の話に移り、水俣病の支援者たちで設立された相思社の運営する（市立の資料館とは別に存在する）水俣病考証館に相当する施設が福島に必要なだという移住者の主張に、メンバーの何人かが、考証館を訪問したことがあったこともあって、イメージしやすく、何となくオチがついたところで対話は時間切れとなる。

【エピソード】『ぼくの村の話』

私の発言に「想像力の欠如」と言った彼は、東日本大震災の支援組織の活動で福島県内に転居してきた、いわゆる移住者である。この日は生まれたばかりの長女を抱っこしての参加であった。彼は言う。「漫画が好きで、『ぼくの村の話』を読むんだよね。三里塚を描いた漫画。自分が住んでいた土地や畑が、いつ奪われるか判らない。誰もがそうなる可能性があって、決して他人事じゃない。立ち入り禁止を見て、そこに思いが至らないとしたら、想像力が欠如しているか、勉強不足としかいいようがない」と。別のメンバーがこうつなげる。「この間の台風 19 号で避難している人もそう。全国で異常気象が続いて、いつ家を追われるか判らない」。この後、当事者とは誰かという話になり、未来会議のような場に立場が違うが集うことで当事者性が生まれるというような対話をうまくまとめる話も出たが、私に苦言を呈した彼は「廃炉資料館で未来会議ができたことが画期的」と言いつつも、あまりそのまとめには納得はしていないようだった。(弓山)

【ダイアログ】模範解答をしようとしていた私

2016 年から未来会議に出るようになって、時々、緊張感が走る場面に遭遇する。多くは当事者性をめぐる議論だ。ボランティアや調査で月に 1 回程度来ていて何が判るんだという気持ちは、きっと地元の人にも、また私たちの中にもある。だが大抵、メンバーの温かな、受容的な雰囲気、そうした刺々しさはうまく包み込まれる。今回は「帰宅できなくて大変ですね」という模範解答を口にした私への、退路を断った移住者からのカウンターだったと思う。学生時代に三里塚の成田空港反対集会に出たり、ここ数年、水俣市に足を運んできたりしているだけに、「では三里塚は？ 水俣は？ 僕にとって何なんだろう？」という思いが頭をよぎった。それでも彼に納得してもらえ答えは何かという模範解答探しも続いていた。結局、対話は時間切れになったが、最後の総括で一人ひとりが自由に発言する時間で最初に彼が挙手して発言し、その後には彼に促される形で私が発言できたことが、せめてもの救いだった。(弓山)

3.7 対話—「よそ者」意識の共有—

市村の 1 回目のグループは自分の意見を発言しやすい雰囲気だったとい

う。それは、はじめに参加者の多くが「よそ者」意識を持っていることを明かしていたからだ。そのグループは、普段は東京で暮らしており、未来会議に出席するために福島にやって来た学生、震災を機に移住し、福島の今を日々伝えようと活動しているライター、震災の2年前に仕事の関係で移住し、震災発生当時は現地への愛着の少なさを感じていた富岡町在住者、そして富岡町で生まれ育ち、震災を機に他県へ移住を強いられながら将来は町の復興のために貢献したいと考える学生、計5名で構成されている。「よそ者」意識の実態はさまざまであれ、震災についてどこか一步身を引いて考えてしまうという共通の感覚が順番に発言する中で率直に述べられる。例えば富岡町出身の学生は被災した当時は何が起こったのかよく判らず、一時避難も急な旅行のように思っていたりした、などの発言である。こうした自分事を突き放して語る「よそ者」意識の共有がこのグループの特徴でもある。

このグループでは、富岡町のために自分も貢献したいという意見が多く、最後の話し合いでは、「よそ者」だからこそ自分にもできることがあるのではないかという議論がなされる。「実際に震災を経験していない自分が被災者の思いを判ったような感覚でいてはいけない」という思いから自分の考えを被災者に率直にぶつけることが難しいという悩みや、震災に関する対話の難しさ、自分たちの経験や思いを外に伝えることへの抵抗が共有されていった。その中で上記のライターから福島の魅力を伝えようと全国紙には掲載されないような小さな復興や福島の現状を日々発信する中で、「よそ者」だから一步身を引いて震災をとらえることができるのではないか、という「よそ者」の可能性を示される。同時に実際に被災していなくても、ボランティア活動で現地と関わった経験は自分の生の経験として、発信する価値が大いにあるという結論にグループは行き着く。富岡町出身の大学生からの、「今は他県で勉強しているが、いずれ地元にもどり、福島の復興のために貢献したい」という力強い言葉とともに、自分たちにできることを探していきたいという前向きな意見が多数出され、話し合いは終わる。

【エピソード】 伝承の難しさと希望

2 回目の話し合いからもとのグループに戻り、「震災体験をどう後世に伝えていくか」について対話が始まった。震災の記憶が薄い、または震災を経験していない世代がこれから社会に出て働いていく中で、当時の教訓を新

入社員に伝えていくことが現在企業の大きな課題であることが共有される。そこから各参加者が自らの活動を省みる中で、私は「ボランティア活動の一環で福島を何度も訪れた経験は、自分の中で大きな学びとなった。さまざまな立場の方の話聞くことで、震災や社会に対する視野が広がったと感じる。しかし結局は「よそ者」という立場から抜け出せない自分がほかの誰かにボランティアで得た学びを伝えることにいまだ抵抗があり、自分の中で完結してしまっていることがとてももったいない気がする」と発言した。私の意見には多くの方が納得してくれるとともに、「福島に足を運び貢献しようとしてくれるだけでうれしい」、「ボランティア活動に積極的に参加したあなたの話だからこそ耳を傾けたいという人を増やすことが大事なのではないか」と意見があった。(市村)

【ダイアログ】「よそ者」だからできること

自分の吐露を受け止めてもらえたことは、これからの活動の励みとなった。これまでの活動の価値を再認識するとともに、自分なりの立場で今後も被災地と関わり、震災について考えていく必要性を感じた。

東日本大震災発生当時、私は神戸市にいたので揺れを全く感じておらず、当時はテレビの向こう側の出来事ではなかった。自分が経験していないからこそ現地で生の話を聞きたいという思いから始めたボランティア活動では「自分は「よそ者」でしかなく、さまざまな学びを得たものの震災について自分が何か語る権利があるのか」というコンプレックスがいつもつきまとっていた。しかし未来会議で多くの人々の意見を聞く中で、「よそ者」意識は多くの人々が抱いているものだと判った。

また、これまで私は現地の人の話はすべて事実のように受け止めてきたが、「被災者の話も結局はその人のフィルターを通して出てくるものであり、必ずしも正しいとは限らないのではないか」という意見を聞き、被災者の意識の隔たりの大きさを納得するとともに新たな視点が得られた。これから被災地でのボランティア活動を続けていく中で、被災された人の話は生の体験として受け止めるとともに、「よそ者」だからこそ震災について一歩身を引いて考え、自分の中で解釈を再構築することができる可能性を探していきたいと思う。(市村)

3.8 復興アプローチの多様さ

青木の参加した1回目のグループは彼を除く他の3人は未来会議に今まで何度も参加している常連である。その中の一人、いわき市在住者の自己紹介となる。彼は以前富岡町で自動車整備の仕事をしていて、今、地域に対して感じていることや、自分が取り組んでいることを語り始める。

彼は「避難区域という言葉が、地域や故郷を隔離するという実態に気づかされた」、そして「何かその言葉によって大切な故郷が汚されている」と話す。郷土のことを話す時にはとても生き生きとしており、話に力が入る。彼は“よさこい踊り”を企画し、実施の中心にいる。「今、夜ノ森で“よさこい踊り”に真剣に取り組んでいるんですよ」と言う時には少し嬉しそうでもある。すでにこのイベントは始まっており、これから長く続く企画にしようという意気込み、願っているようである。青木はどんな“よさこい踊り”が、夜ノ森では繰り広げられるのだろうかととても興味をもったという。

青木が参加した2回目の対話は、1回目と比べて雰囲気は違っていった。中心となった話題は廃炉という仕事は後ろ向きなものではないかである。メンバーの一人は「みんな復興や廃炉作業に一生懸命だが」と前置きをしながら、「復興の仕事に明るい未来や将来がない」という趣旨の発言。さらに他のメンバーからも「自然災害には勝てない」「原発は良くない」「明るい未来はない」という言葉が続く。その後、復興の現実を理解することの意味や未来をどう捉えたらいいのかなど語り合う。話はあまりまとまらないで予定の時間が過ぎ、2回目のグループワークは終了する。

この後、全体の総括となる。自分の関わったグループ以外のことも共有できるように、数名が挙手をして発言をしていく。そこでは実際に初めて第一原発を見た現実感、風化に対する残念な気持ち、こうした対話の重要性が語られる。福島市から来た男性が同じ現場を見ても地元の人とそうでない人、漁業関係者や地権者、それぞれ見方が違うことに気づいたと感慨を述べる。神奈川県から何度も浜通りに足を運んでいる常連が未来会議のような対話の場が貴重であることを訴える。元東電社員で地域活動をしている男性が活動において「自分は正しい」という意識が対立ばかりを生み出してきたことを反省する言葉を口にする場面もあり、ファシリテーターがこれを引き受ける形で対話の総括が終わる。

【エピソード】 グループによる雰囲気の違い

2回目のグループで私は「廃炉という分野の技術革新は、カリフォルニアのベンチャーのような明るさとは違いますね」と発言したが、ほとんど無視された。廃炉のことを何か絵空事のように捉えていると思われたのかもしれない。「廃炉の仕事に明るい未来や将来がない」という発言は「正直その通りだ」と思う部分があると共に、「廃炉の中で生まれる新技術」もあるのではないかという意味で私は捉えていたが、意図は全く伝わらなかった。

震災という背景では、言い方や言葉の選び方は、かなり慎重でないといけない。今回は無視される程度で終わったのだが、ばあいによっては、一言が相手のところを傷つける結果になることもあるかもしれない。こうした言葉の選択や言い方に慎重にならざるを得なかった2回目のグループと、逆に「いつでも重苦しいことばかり 8年間考えて生きては行けませんよ」と発言し“よさこい踊り”のことを嬉々として語るメンバーがいた1回目のグループでは、同じ未来会議のメンバーでも、各自が持つ関心が異なる。震災への問題意識や復興の捉え方に要因があるのかもしれないが、この違いはどこにから来るのであろうか。(青木)

【ダイアログ】 多様な復興への取り組み方

復興というアプローチは多様なものがあるものだという事を“よさこい踊り”の彼の発言で気づかされる。私は復興に廃炉や、避難地域の汚染除去、道路整備、農業や漁業の産業振興などを連想していた。そこにはダメージや失われたものという負のイメージが前提とされていた。2回目のグループの対話はそこに焦点を当てていた。

しかし“よさこい踊り”の彼の考える復興は少し違っていた。「いつでも重苦しいことばかり 8年間考えて生きては行けませんよ」と彼がいう言葉がとても印象的であった。8年間は、事実大変な歳月を過ごして来たと思う。しかし、それだけを考えて毎日を過ごすことはできない。生活が大変であればこそ、やはりもう一つ心の緊張を解く時間、何か欲しいということも全く当然である。地域の人や、親類縁者と、祭りの中で触れ合う時間を過ごし、地域の絆を結び直す時間は、とても重要な復興なのだ、私は理解した。「単に踊りのイベント」と、祭りや踊りの意味や力を私は簡単に捉

えすぎている。不安や深刻な問題を抱えていればいるほど、それを乗り越えるエネルギーの源として祭りや踊りが必要なのもかもしれない。それは団結などという言葉よりもっと深い意味合いを含んでいるのだろう。

復興支援という言葉は一様ではない。それぞれの人にとって、また、時期により変わってゆくものだろう。震災の当初は一次的な物資、水や食料かもしれない。しかし、震災後 8 年の月日が過ぎ、そこで生活をしてゆく人々にとっては、いま復興として何が求められているのだろうか。彼が取り組む“よさこい踊り”への熱心な語り口を聞きながら、自分がステレオタイプ化した発想しか持たないでいたことに気づかされた。(青木)

4. 得られた知見—利他の精神と気づき—

4.1 関係準拠的で醒めた「利他の精神」

2.2 で述べたように、今回の企画に参加者した私たちは、諸条件が整い、内発的に、他者との交流と自己実現を求めて、無償で善き行いに向かうボランティア従事者像とやや異なるきっかけで VG に関わりをもった。それは表 1 のように「サークルの友人に誘われて」「授業で」「出張先」「バイト先」「業務の一環」という外発的要因がほとんどであった。もちろん私たちがボランティアやこの企画に自発的に、むしろ高い意識をもって関わりをもっていることは太田 (3.2) の車中のおしゃべりに対する苛立ちからも十分に理解できよう。そうした自発性や高い意識は 1 で確認したボランティア従事者像、つまり「内発性・自発性」、「無償」「公益性」「役に立ちたい」、「交流」「リーダーへの憧れ」「自己実現」「自己成長」「継続的活動への希求」という動機や目標と通じるものがある。しかし、私たちの話し合いでも、それは質問紙調査なら「どちらかという」とチェックできる程度であり、会議中にオンになっているレコーダーの前で明確に宣言できるものではなかった。むしろ人間関係や状況から与えられた／掴んでいったきっかけにこそ、初発の動機があったことは間違いない。

また自己実現や自己成長については、「無意識のうちにあの時の（震災を伝える TV を消した）後ろめたさがあったからだと思う」（市村の教養卒論）という「自己実現（の裏返し）」に関わる文言が語られるばあいがある³⁾。

ただむしろ自己への言及には、「自分からだと〔ボランティアを〕やるのが難しいので団体に所属することで関わっていける。でも最近忙しくてあまり参加できていない」（中野）、「前に入っていたダンスサークルとは全然考え方が違う人がいる。（略）面白い、まじめ、将来のことを考えている」「〔新規加入者について〕1年からボランティアって凄い」「ボランティアやっていると一般には凄いねって」（太田）と他人事のような語りから醒めた自己規定も見られる。

4.2 気づきは起伏をもって更新される

私たちがかかる関係準拠的で醒めた動機は、ややもすると人間関係やその場の状況に左右されやすく、また困難に際して何が何でも乗り越えようというよりは「仕方がない」「無理をしない」という活動持続における脆弱さとなってあらわれやすい。被災地のために何かをしたい、そしてそこで自分も成長したいという利他の精神は、それゆえ直線的に進展するものではない。それは諸条件が整い、内発的に、他者との交流と自己実現を求めて、無償で善き行いに向かう自律的直線モデルよりも、下記のような気づきをめぐってアップダウンのある、後述する N 字型的な起伏があることを確認したい。

4.2.1 「意味を見いだせない」から新たな意味への気づき

先行研究によれば、典型的なボランティアは交流と自己実現を求めてというが、自己実現を求める市村にとっても、それは簡単なことではなかった。市村は教養卒論でボランティア1年目をこう述懐する。

「福島大の学生が日々行っているボランティア活動に参加させていただいた。しかし1年目は散々の結果だった。あの日何があったのか、人々が何を思って当時を過ごし、何を思って今を生きているのか、僕らは包括的な知識を望んでいたが、そんなものほどこにも転がっていなかった。がれきの多くは取り除かれ、哀しみをあらわにする人々の姿はもうなかった。被災者の方とたわいもない会話を楽しむだけの時間に意味を見出すことができずにいた。片道3時間かけて福島に行き、何も達成感を得ることなく帰ってこることが続き、正直苦しかった」と。

しかし援農を続ける中で、彼の思いは「それでもにこやかに迎えてくれた学生がふと当時のことを振り返り、地獄のような日々だったと顔に陰り

を見せた一瞬が忘れられず、まだここで学ぶべきことがたくさんあると思いい、2年目も活動を続けることにした」と少しずつ変わっていく。

4.2.2 相手への問いから自ら自身への気づき

こうした、客観的な状況が変わらずとも、むしろその受け止め方の変化は、今回の企画のレポートにも見られた。青木・弓山 (3.1) と太田 (3.2) は、東電社員の謝罪に対して「別に謝られても」と、また記憶に残るほど、何らかの違和感を抱いていた。弓山は対話の席上、謝罪をした本人と同席したことにより、それを問うたという。このやりとりで弓山が納得する回答は得られなかったが、対話全体を通して、また「東電の電力は全く福島に来ていない。全て東京に行っている」という発言に接し、自らの責任に思いが至り、違和感の出所が東電社員の謝罪より、むしろ自らの責任が隠蔽されてきたことにあったと気づく。

4.2.3 突きつけられる自己切開の気づき

こうした自らへの振り返りは疑問が氷解するとともに、私たちに不勉強や認識不足の自己切開を突きつけるばあいもあった。中野 (3.4) は風評被害とって「農産物の放射能汚染に対する過剰な反応」ばかりに気をとられ、また風評被害は年々和らいでいたと思って発言したところ、対話相手の「驚いた表情」を見ることとなった。市村 (3.5) は対話の場においてうまく語れないことから「認識がとても薄かったと実感」する。弓山 (3.6) は帰還困難区域に言寄せて、地元住民の辛酸を、さも判ったような発言をして、その他人事のような発言に地元住民や移住者から「想像力の欠如」を指摘される。

しかしそこで打ちのめされて終わるのではなく、対話を重ねることで、中野 (3.4) は「自分の知識・想像力のなさを実感」することとなり、市村 (3.5) は「現地で受けた学び」だと思っていたものが自分の中では「知識」に過ぎなかったと気づき、弓山は「当事者とは誰か」という、さらなる問いに向かうこととなった。

4.2.4 誤解から他者の背景への気づき

こうした気づきの変化は企画終了後のレポート推敲時にも起こった。太田 (3.2) は第一原発視察の往路のバスでの乗客の「おしゃべり」についてレポート初稿に「遠足気分で行ってみたかっただけ」「事故であまり被害を受けなかったのではないだろう」と、強い批判を記している。しかしレポ

ート検討会で、「おしゃべり」をしていたのは、原発事故で今も避難を余儀なくされている当事者で、未来会議の主要メンバーであったことを知り、「もうそんな暗い話は聞きたくない、楽しく生きたい、と彼女なりに考えた抜いた結果であり、(略) そこから、少しでも前に進みたいという意思の表れなのではないだろうか？」と改稿をしたためている。その上で改稿レポートを「なぜこの人はあのような行動を取ったのだろう、とその人の背景を捉えることが重要だと感じた」と結んでいる。

同じように青木 (3.8) も対話の際に「自然災害には勝てない」「原発は良くない」「明るい未来はない」とのネガティブな発言を訝しく思ったが、その後、対話のメンバーと再会し、一見後ろ向きともとれる発言の背景に「壊された街の再生への切実な思いと、自分自身が目指す目標への困難な挑戦への意気込み」を感じるに至る気づきをフィールドノートに綴っている。

4.2.5 負い目から生まれる新たな気づき

誤解とは異なるが、自分に対するコンプレックスや失言という負い目があったからこそ、それが新たな気づきを得るばあいもある。市村 (3.7) は継続的に福島に足を運んでいたが、「結局は「よそ者」という立場から抜け出せない自分がほかの誰かにボランティアで得た学びを伝えることにまだ抵抗があったという。市村はそれを「自分が何か語る権利があるのか」というコンプレックス」とも表現している。しかしその「よそ者」意識が対話によって、「「よそ者」だからこそ震災について一步身を引いて考え、自分の中で解釈を再構築することができる可能性」を模索するに至る。

青木 (3.8) は2回目の対話で廃炉にともなう技術革新をベンチャー企業のように語り、メンバーから無視され、自分の発言を「相手のこころを傷つけ」かねない失言だったと振り返る。しかし同時に、この体験があったからこそ、1回目の対話で聞いた“よさこい踊り”による復興の対話が2回目の対話と異なるコントラストを描いて想起され、「地域の人や、親類縁者と、祭りの中で触れ合う時間を過ごし、地域の絆を結び直す時間は、とても重要な復興」との気づきを得ている。2回目の失言体験があったからこそ、1回目に口にこそ出さなかった「単に踊りのイベント」という印象が反転し、「不安や深刻な問題を抱えていればいるほど、それを乗り越えるエネルギーの源として祭りや踊りが必要」であることに気づいたのだ。

4.2.6 気づきから新たな探求と活動へ

誤解、コンプレックス、失言という「躓き」ともいえる事態から気づきを得て、新たな探求や活動に向かうことはボランティア従事者に珍しくない。川島は教養卒論で、彼女がボランティアをする子ども食堂で、ご飯に塩をふって食べている子どもを、テレビのドキュメンタリー番組を思い出して、貧しく「かわいそうな子」ととらえたことを書いている。しかし注意深く、その子を見ていると、塩をかけた行為は単なる嗜好の問題で、むしろ「おいしそうにご飯を食べ、周りの友達とおしゃべりをしたり我々ボランティアに積極的に話をかけたり、純粹におしゃべりを楽しんでいる」姿だったという。そして彼女はその子は決して「かわいそうな子」ではなく、単に「ご飯を食べながらおしゃべりをして楽しい思い出を作りたい子」であったことに気づく。こうした誤解を反省したうえで、彼女の教養卒論は「メディアでは語られない真実—ボランティア活動に参加して—」というタイトルのもと、メディアの報じる一面性とボランティアの多面的な意義を論じるものとなり、そこには「重要なのは、我々はそういった子に対して不憫でかわいそうだなと思うのではなく、子ども食堂とは子どもたちに温かい場を提供できる素敵な場所」であるとの決意が述べられている。

5. まとめ

5.1 利他の精神のN字型モデル

以上、見て来たように私たちの被災地のために何かをしたい、そしてそこで自分も成長したいという利他の精神は、諸条件を得て、交流や自己実現を求めて、内発的に公益性のある活動に向かう自律的直線モデルとは質問紙に答えるばあいは矛盾しないものの、私たち一人ひとりに当てはめると、むしろ違ったプロセスをたどることが判った。それは講義や人づてや仕事・研究といった人間関係や他者や状況から与えられた／掴んでいったきっかけに依拠する関係準拠的な関わりから、醒めた目で自己を規定し（あたかも他人事）、そのうえで（だからこそ）実践の場で躓き、逡巡・迂回するかたちで、そこから気づきを得て進展する利他の精神のプロセスといえよう。このいわば躓きと気づきによる起伏のあるプロセスを、ボランティ

ア従事者における利他の精神の「自律的直線モデル」に対して、私たちは「関係準拠的 N 字型モデル」と呼ぶこととした。

特に 3.2 の諸項目で確認したように、この関係準拠的 N 字型モデルは、私たちを直線的に目標に向かわせるものではなく、時に活動の無意味さや他者への問いから立ち止まり、自己に振り返らせ、時に自己切開を伴いつつ、目標に向かわせるイメージである。また私たちは他者を表面的な言動から誤解したり、負い目を感じたりして躓き、目標には向かわず逡巡し、迂回するものの、むしろこのことによって他者をより理解できるきっかけや新しい気づきを得たりして、自他ともに利するような新たな探求や活動に向かうことができたことを確認した。

本稿は企画に参加した記録を用いて考察を重ねたが、これはボランティア体験記でも同じことが言え、例えば私たちの実践でいえば援農をしたり、子ども食堂を運営したり、地域の防災活動の手伝いをしていても、私たちは講義や研究と活動を天秤にかけつつ、現場で対話し、躓き、逡巡・迂回しつつ、自他を利する道を模索するだろう。4.2.6 の川島の記録はそれを雄弁に物語っている。

5.2 今後の課題

本稿で私たちが自らの体験を、これまで見て来たように対象化し、エスノグラフィとして記述できたのは、企画参加の流れや体験を TLED 法に従って記録してきたことによる。通常ならば、事前の打ち合わせ、企画参加時のメモ、事後の振り返り、レポート作成・推敲を経て、私たちは自分の体験の特殊性を捨象し、紋切り型の空疎な結論（自分体験を人に伝えたいなど）を記したかもしれない。TLED 法は、自分が切り取ったエピソードやそこでの他者・自己とのダイアログ、さらには推敲自体も対象化し、「私」のこころの変化をも記述することが求められる。本稿がボランティア従事

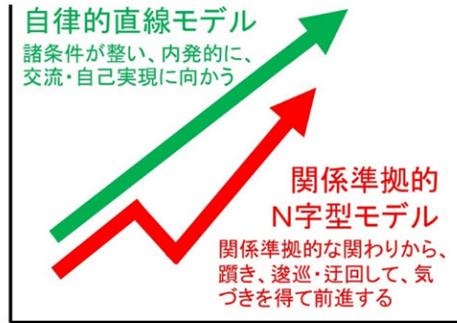


図1 利他の精神の2つの進展モデル

者の示す成功例や模範解答ではなく、むしろ躓きや逡巡・迂回にフォーカスできたのは、この TLED 法によるところが大である。

特にボランティア従事者が相互に、また現地での人々との「協働的实践の過程を通して、「こんな社会にしたい」という思い」[渥美 2014: 86] を共有し前進するために、その過程を記すことは重要であり、エスノグラフィと TLED 法のセットはその重要なツールとなりうるだろう。ただ本稿の試みも「関係準拠的 N 字型モデル」という私たちの志向性の一端を解明することはできたものの、利他の精神のプロセスは、直線/N 字の二類型に収斂するのか、宗教心に基づく利他の位置づけを含め、十分な検討が必要である。議論はそれるが、エスノグラフィと TLED 法のセットは自己を見つめるには役立つかもしれないが、「より良い社会とは」「被災者とボランティアとの関係とは」という少し大きな問いに有効かという点と心許ない。また本稿では定性的な検討で「関係準拠的 N 字型モデル」を導き出したものの、それを定量的にどう検証するかという問題も私たちの前には横たわっている。方法論的洗練と理論的検討と合わせて今後の課題として書き留めておきたい。

[付記] 本文中 (3.2) にも記しましたように未来会議の皆さんの暖かな、受容的な雰囲気感谢您的。本稿構想を弓山が「宗教と社会」学会 28 回学術大会で発表し、多くのご意見を賜り、お礼申し上げます。なお本稿は科研費（挑戦的研究(萌芽)19K21750）の成果の一部です。

註

- (1) 宗教研究の文脈で述べるなら「宗教研究者が宗教者や行政や NPO や地域関係者などと協働しつつ、現場に従事し、こうした関与から調査を積み重ねるアプローチ法」[河田ほか 2018: 5] と定式化されよう。
- (2) 東工大には「教養卒論」と呼ばれる 3 年次後期の必修科目があり、4 年次の卒業論文とは別に 5000 字から 10000 字のレポートを提出することになっている。ここでもペアワークを中心とする相互インタビューとピアレビューによって受講者は原稿を仕上げていくこととなり、はからずも TLED 法におけるダイアログにあたる他者・自己との対話を重んじる構造になっている。市村と川島はこの教養卒論で自分たちのボランティア体験をとりあげた。
- (3) 「後ろめたさ」のような心理的葛藤を、亀田・中地 [2020] は「充実願望」と結びつけて示唆している。

参考文献

- 渥美公秀 2014 『災害ボランティア』弘文堂。
- 稲場圭信 2017 「宗教社会学における災害ボランティア研究の構築」『災害と共生』1(1): 9-13.
- 岩瀬真寿美 2006 「利他的行為に含まれる「自利」の意味」『教育論叢』49: 19-29.
- 亀田凌雅・中地展生 2020 「大学生のボランティア体験と大学生生活ストレスサーの関連の検討」『帝塚山大学心理科学論集』3: 37-44.
- 河田純一・坂場優・富澤明久・福井敬・宮澤寛幸・弓山達也・渡邊龍彦 2018 「路上生活者支援の宗教性・価値・共同性: ボランティアはなぜお寺でおにぎりを握るのか」『宗教と社会貢献』8(2): 1-33.
- 楠本秀忠・三井規裕 2020 「学生ボランティアキャンプリーダーの志望動機について」『大阪経大論集』70: 7-15.
- 國木孝治 2020 「大学生のボランティア経験とボランティア観: 至誠館大学生の実態について」『至誠館大学研究紀要』7: 109-116.
- 佐々木美和・稲場圭信 2017 「泉大津市における「防災まちあるき」: 宗教者と行政連携をはかったアクションリサーチ」『宗教と社会貢献』7(1): 19-34.
- 霜村真康・菅波香織・橋本栄子・藤城光編 2020 『「浜通り合衆国」という挑戦』未来会議事務局。
- 杉本守 2019 「国立青少年教育施設における大学生ボランティアの活動への参加動機について」『青少年教育研究センター紀要』7: 72-81.
- 高田恵美子 2012 「本学科学生ボランティア活動に関する一考察: ボランティアの自主性と教育的効果」『関西女子短期大学紀要』12: 1-11.
- 千葉たか子 2009 「パラダイム転換は可能か: 青少年の意識にみるボランティア観」『青森県立保健大学雑誌』10(2): 205-216.
- 似田貝香門・吉原直樹編 2015 『震災と市民』2、東京大学出版会。
- 朴景善・王文潔・孫雪瑩・稲場圭信 2018 「地域における寺院の社会貢献: 熊本県宇城市豊野町の光照寺の防災・復興活動を事例に」『宗教と社会貢献』8(1): 101-127.
- 三谷はるよ 2016 『ボランティアを生みだすもの』有斐閣。
- Adams, Tony E., Holman Jones, Stacy. and Ellis, Carolyn. 2014 *Autoethnography*. Oxford University Press.
- Reed-Danahay, Deborah. 1997 "Introduction." In Reed-Danahay, Deborah (ed.), *Auto/ethnography: Rewriting the Self and the Social*. Routledge.